

# 山口県立医学専門学校

## 戦後の再スタート

昭和20(1945)年9月も中旬に入った頃、山口県立医学専門学校(以下、山口医専)ではようやく授業が開始された。外地の学校や軍関係の学校、さらには廃校になった学校から多数の転入生を迎え、一時的に学生数が膨れ上がったが、食糧難、学費難等のため学校を去る学生も多かった。

昭和21年3月、富田雅次校長は戦中教育の責任を取り辞職し、松本彰が校長事務をとった。

同年9月、宇部興産同仁病院、東見初病院、宇部市立伝染病院を附属病院として臨床講義、実習が始まった。10月には学校校舎内に内科、外科の仮診療所が開設され、翌年の3月、附属病院長に松本彰校長が就任した。



松本彰校長



仮診療所での外来



臨床実習

## 開学記念祭

昭和21年、山口医専開校2周年記念として、ソプラノ歌手関種子、ピアノ伴奏に太田道子を招き、渡辺翁記念会館で音楽会を開催した。街頭での切符販売や、列車の乗車券・旅館の手配、出演者に対するギャラの手配など、学生全員が一丸となって準備にあたった。戦後初の生の音楽会とあって広島や福岡からの客もあり大盛況であった。



当時は食糧難のため、出演料の半分は米で払ったらしいよ！



# 山口医専存続の危機 — A級B級問題 —

戦後の混乱からようやく再スタートをきった山口医専であったが、間もなく存続の危機に立たされた。戦後の教育改革では、医学教育は大学に一本化されることとなり、戦時中に急造された医学専門学校はGHQの審査によりA級校とB級校に選別され、A級校は旧制の医科大学へ昇格、B級になれば廃校となることが決まった。

昭和21(1946)年、山口医専では教職員、学生が一団となり市中行進をし、青柳県知事に要望書を手渡したり、県内に署名を取りに歩いたりと熱心な存続活動を行った。また、山口医専がA級と判定されなければ、県内における医学教育の火は消えてしまうため、地元宇部市も昇格運動をはじめた。



(上) 県知事に要望書を手渡す山口医専生  
 (右上) 県知事を囲んで昇格歌を歌う山口医専生  
 (右) 山口医専の昇格運動を伝える新聞  
 (「防長新聞」昭和22年1月20日)

県や市、学校当局、在学生、在京の国会議員、地元企業など一体となった運動が実り、昭和22年4月、山口医専はA級校に認定され、5年制専門学校として、昭和25年まで存続することになった。6月には大学令によって、旧制の山口県立医科大学の設置が認可されるとともに、修業年限3ヶ年の予科の設置も認可された。山口医専の2年生以上の学生は、試験によって予科2年に編入し、同時に予科1年生の入学試験も行われた。

# 新制山口医科大学の誕生

昭和22(1947)年4月に施行された「学校教育法」により、昭和24年に新制大学が発足することとなり、県内でも、旧制高等学校や旧制専門学校を統合して、総合大学を設立する案が具体化しつつあった。旧制山口県立医科大学では新制大学への昇格を目指し設備の充実を図った。

昭和22年11月、附属病院長に水田信夫が就任し、翌23年11月に第1期、24年3月に第2期工事が竣工、全国一とも言われる設備の附属病院が完成した。

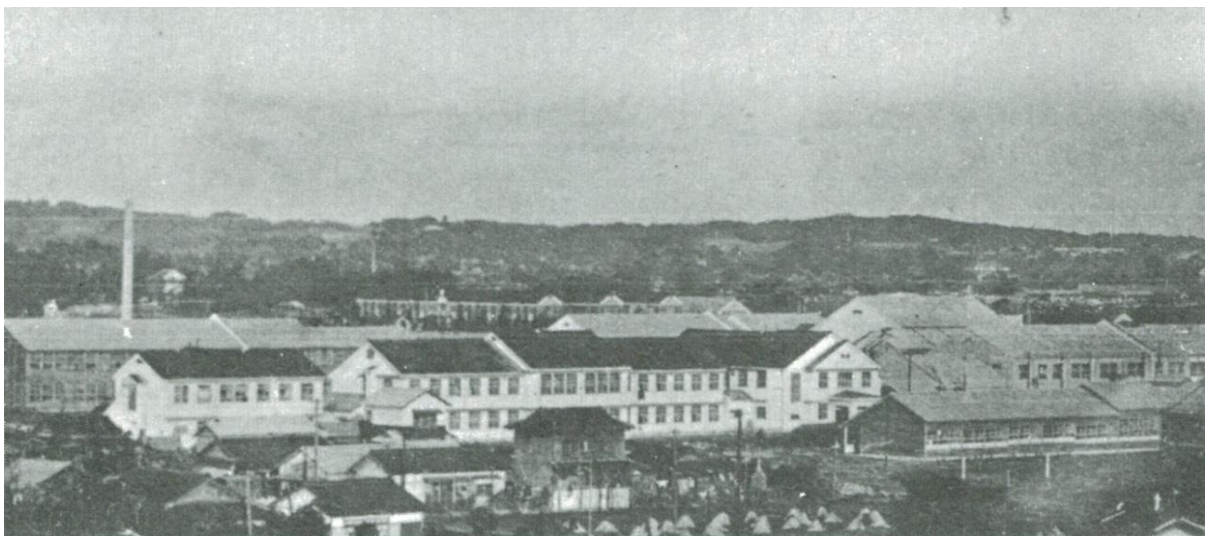
昭和24年3月、山口医専の第1回卒業式が行われ、87名の卒業生を送り出した。そして4月、新制山口県立医科大学が開学し、5月7日に盛大に開学式が行われた。これに伴い予科の募集は無くなり、昭和26年には予科及び山口医専は廃止された。



第1回山口医専卒業記念写真  
竣工したばかりの附属病院前



水田信夫附属病院長



旧附属病院全景

総工費5,600万円、総坪数4,000坪、8棟の充実した設備を誇る病院であった。

# 学生生活



ラグビー部  
全国大会に出場



サッカー部



卒業記念ダンスパーティー  
昭和22年頃からダンスが流行り、いろいろな場  
所でダンスパーティーが催された。



麻雀をする学生



予科の学生



市民館での洋画鑑賞

